

のものはこの寫しである。井本文庫の運氣考二冊は本誌前號に記されてゐた、大阪鹿田松雲堂より入手されたもの由である。

氣候懸斷錄

大矢氏紹介のもの他に次のものがある。

\* 函學莊舍目録「ちか一二三號」 享和三年

井本文庫

文化二年

宮内省圖書寮

天保九、嘉永二、安政七年

\* 國書解題四三六頁

天保十年

\* 明時館圖書目録

天保十一年

尾島領宥氏

天保十二、弘化五、安政七年

\* 印のものは現在の所在は不明のものである。享和三年のものは白龍菅正信著とある。明時館圖書目録とは澁川家の曆書目録で、現存のものではない。これによつて氣候懸斷錄は少くとも享和から安政迄約六十年間續いてゐたもので、名古屋板晴雨考と同時代に西國方面にて用ひられたものであらうか。

「晴雨考の類版」補足

前號で晴雨考の類書に就いて書いたところ、尾島領宥翁から早速これに記載のない同種の書物の御教示を賜つた。又その以後私自身が見出したものも一二あるので、それ等を一まとめにして次に記録して置く。

\* \* \* \*

以上の調査によつて京都版運氣考は年代から考へて晴雨考に先つて行はれたものであり、播州の氣候懸斷錄、尾州の晴雨考がそれに續いて享和、文化の頃から弘く世に行はれ、仙臺版の運氣考、晴雨考が稍遅れて弘化嘉永の頃から東北方面に行はれたものと思はれる。他の類版は恐らく一地方に限られて行はれ、年代も永くは續かなかつたものであらう。

以上尾島、大矢、平山、井本諸氏の御教示によつて晴雨考の過去に於ける年代的並に地方的存在の輪廓をかなり明かにし得た事を感謝する次第である。

(追記) 大矢氏によれば愛知縣刈谷圖書館に安永七年、天明三年、九年の運氣考が現存し、何れも江匡鋤序文のものである由。

又筆者は最近安政六年の氣候懸斷錄の一寫本を入手した。

(昭和二十年三月)

大 矢 眞 一

1、(安政四年)晴雨考 加賀岡松任版(金澤市立圖書館藏)  
縦五寸三分、横三寸五分の小冊子で普通の晴雨考より型が小さい。巻頭には運氣論による當年の氣候の概説があるが、これに普通のものより簡單である。その後一ヶ年毎日の晴雨が○晴、○曇、

●雨、○降晴、□風、●雪の如き符號で記されてゐる。序には理學館とあるが著者名は明かでない。

②、五發人豐紀 島津大定撰 册子型(尾島氏藏)

嘉永五年の分は福島上町、臥龍堂丈助版で、嘉永八年の分は淺草新寺町、玉光堂善助版であるが、内容は殆んど變らない。何れも普通の運氣考の類である。

尙ほ前號に神田氏の述べられた天保十三年壬寅七曜晴雨定考

(尾島氏藏)も島津大定撰の一枚刷りで、上欄に七曜晴雨變察之法、北斗星明暗考等を載せ、下二欄に各月に付、毎日の晴雨を記してゐる。

③、教民天德地福傳 刊本 一册(尾島氏藏)

卷末に爲農圃一開出内經運氣不傳玄微之遺旅江戸佐内町南裏畑、英保氏一風軒良哲西好、謹綴之、寶永三丙戌稔正月吉辰とあるが、運氣考としては最も古いものであるかも知れない。運氣論によつて各月の運氣、氣候及び當年の作物の豊凶を述べてゐるが、毎日の晴雨は記してゐない。

同様に毎月の氣候だけを記して毎日の晴雨を言はないものには次のやうなものもある。元來運氣論だけを基礎にすればここまでしか言へないわけである。

④、天明元年氣候考 (尾島氏藏)寫本一册、著者不詳

⑤、丙戌東都氣候書 (帝國學士院藏)寫本一册、久間修文稿

内題には文政九年歲次丙戌運氣立成とある。

附記、一

これを書いた後に『享保大阪出版書籍目録』巻尾の「絶版書目一申に

文化二丑年四月 氣候懸斷錄 素人の藏版を無届賣弘めたるのみ

「運氣考」と申書に同様の書物に付、版 賣弘人 敦賀屋九兵衛

本不殘奉行所へ取上、閣所、賣買禁止

とあるのを見出した。しかし前號に掲げたやうに氣候懸斷錄はこの後も引續いて發行されてゐる。この經緯はどうなつてゐるのであらう。尙ほ京都の江匡鋸の運氣考も寛政二年のが存在し、これから文化二年までは十五年ばかり距たつてゐるが、先年絶版になつたといふのは何時頃であらう。これ等について何か材料を御存知の方は御知らせ願ひたい。

附記、二

この頃愛知縣刈谷圖書館にある安永七年、天明三年、天明九年の運氣考を一覽したが、何れも江匡鋸の著。そして天明九年の分に「此運氣考モ不計十六年前ヨリ今ニ至リ毎年々世ニ弘メ來リシガ云云」と見えてゐるので、その創刊は安永三、四年であることが分る。